

川南（袖の浦）地名 あれこれ

五十嵐 武晴

一 袖の浦を詠んだ小野小町

「我身こそ心にしみて袖の浦ひる時もなくあわれなるかな」

この歌は、九世紀後半の六歌仙の一人、小野小町の「小町家集」にみえる。

小町は歌人としてだけではなく、美人の代名詞のように言われているが、伝説のペールに包まれた女性である。小町は采女の称であるとか、遊行の巫子であったとか、いつ何処で生まれいつ死んだかも定かでないが、いろいろ

ろの説の中でもっとも有力な説は、彼女が出羽国の郡司の娘であったと言うのである。

「袖の浦」は、平安時代すでに歌枕として多くの歌人に詠まれているから、小町が父親の郡司と共に出羽国にきて、袖の浦を眺めながらこの歌を詠んだとは考えられない。

むしろ都で伝え聞いた袖の浦を、自分の感傷の中に織り込んで詠ったという見方もある。

「袖の浦」の地名には、こんな伝説ものこっている。

弘法大師空海（七七四―八三五）が、羽黒山に行った最上川を渡らなければならないが、渡船賃がなかった。このため弘法大師は、自分の衣の袖を引きちぎり船頭に

やり、ようやくと最上川を越えることができたので、このことから袖の浦と呼ばれるようになったというのである。

また、地形からきたと言う説もある。最上川の下流は、南北の州が左右に突き出して、その姿はまさに袖をひるがえしているような景観から、袖の浦という地名になったというのである。

しかも、その風景はまさに絶景であつたから、歌枕として吟に上がったものであろうが、最上川の袖の浦が全国唯一の「袖の浦」ではなかつたようである。

「人はみないそぎ立つめる袖の浦獨藻鹽を垂る蟹かな」

紫 式部・「源氏物語」(早蕨)

「袖の浦に唯わがやくと汐垂れて舟渡し足る蟹かな」

和泉 式部・「和泉式部日記」

二人の式部、出羽の国袖の浦にきて、この歌を詠んだとは考えられないから全国の津々浦々に袖の浦と称する風光明媚の地があつたので、歌枕にもなつたのであろう。

また、「袖の浦」の地名には、アイヌ語説もある。

「袖」は、アイヌ語の「ソウテー」にあたり、「ソウ」

は「岩」・「テ」は「此処」で、「岩が此処にある」と言う意で、往古、砂丘形成前の縄文海進期の頃は、飯森山の岩に波浪が打ち寄せていたというのである。この説は、現在の赤川新川を掘割工事中に、偶然にも発見された「黒森遺跡」の跡が、この飯森山の南方の一線上に並ぶことから、海岸線は今日よりも東部に進入していたであろうと思われるから、飯森山の山脚に白波が立っていたと考えることもできる。

二 飯森山

東北公益文科大学の場所は、飯森山三丁目。

現在、大学周辺の地名は「飯森山」であるが、以前は「飯盛山」と記した時代もあつた。

また、飯森山の地名由来についても、いろいろの説がある。

「日本地名大辞典」には、「飯盛山の山名の由来は、飯を盛り上げた形の山谷にちなむ」とあり、「飯盛山」

という地形説をとっている。

一、「出羽国風土記」の「狼煙」説

風土記には「・・・子按ずるに此山古烽候を説たる処にして火守塚といへるを女文字にひもり塚と書たるを後に火をいと転じていもり塚とは唱来れるにや。太平記の化に服したる世火守の文字稚ならざる故に飯盛とは書改めたるにや。田川郡已火の山を恋の山と書改たるにや。田川郡已火の山を恋の山と書改しこともありけるとぞ。飯盛の東の方に崩れたるを見るに砂山にして色の黒き砂の交わりたるは煙の火氣を以て色の替りたるや・・・」とある。

「飯ノ森」は「イヒノモリ」と読み、「火ノ森」の当て字とも考えられるというのである。

「火ノ森」は、烽を上げ敵の襲来や火急の用を伝えるため、火を焚いた場所で火打山・火打森・火打野と称した。これを略して火山・火森・火野などと言った。これらに嘉字の「飯」（イヒ）を当て、飯ノ山・飯ノ山・飯森山になったという説である。

しかし、烽はただ火を焚いて煙をあげればよいものではない。情報をリレーする要所であつたかどうかにかかわってくる。

嘉祥三年（八五〇）は、荘内にとって災厄の年。直下型の「庄内田川地震」が発生した。

その被害のようすが「続日本後紀（八六九）」には、「・・・地形変じ圧死せる多し・・・」とあり、「文徳実録（八七九）」には、「地大いに震裂け山谷処を易え圧死する者聚し・・・」と。国府井口の地であつたともいう廣野村（酒田市広野）付近では、村人が全滅した村がでたとある。秋田県の象潟はこの時の地震の際に陥没し生じたともいわれている。

仁和三年（八八七）の五月、出羽守坂上茂樹は、出羽郡井口にある国府を最上郡大山郷に遷したいと朝廷に奏上している。その訳は嘉祥三年の地震による被害で「・・・形勢変わり改まり既に窪泥と成る加え海水漲り移り府の六里の所似迫る大川崩壊・・・堤塞ぐの力無し・・・」とある。

最上郡大山郷は現在の山形市周辺らしいが、この案は

認められなかった。

この時の不認可の文書の中に「・・況復秋田雄勝両城相去已遥烽候不接・・」とある。いわんや秋田雄勝城をさること遙かにして烽候に接せず というのである。

ということとは、最上郡などに国府を移しては、離れ過ぎて烽火台で秋田との連絡がとれないということである。それでは、出羽郡井口地の国府には烽火の連絡網があったのであろうか？

井口の国府は、現在の広野とも藤島町の古郡とも言い定かではない。

火や煙が確実に視覚にとらえられる限界は、直径二十キロ以内と言われている。

飯森山を中心にして、半径十キロの円を描くと、広野はもちろん藤島・鶴岡も入る。北は吹浦に達する。

秋田から日本海沿いに、烽で伝達するのに飯森山は場所的にはよい位置にあるが、海拔四十米そこそこの丘である。障害物のない海岸線だったとしても、現実に秋田から見えるかどうか。

天智天皇（六六二）の頃、すでに九州から大和までの

烽の配線ができ、その頃の「火の山」の地名が今日でも残っているという。飯森山の北方、秋田・雄勝側にもう一つ「火の山」があれば、この説も信頼度が高まるのであるが。

二、「東国遊行談」の「祈り山」説と「井守」説

松井鶴有の、「東国遊行談」（天明七年・一七八七）に「祈り山」・「イモリ山」とみえる。

「出羽国風土記」には、「・・・又一説に往古は弘法大師此処におひて祈をし給ふ山にして祈塚と云へる人もあれども 羽源記庄内物語等に飯盛山斗書て祈塚とはなし・・・」とある。

弘法大師がこ袖ノ浦にやってきたかどうかは伝説としても、柳田国男は「塚と森」にこんなことを書いている。

「日本人には、昔から高い所に神を祀るという慣習がある。その場合、一番高い所（峰）よりも形の整った孤峰を選んだ。平地の場合は土を盛り塚をつくり神を祀った」と。

たしかに山の形は牛の背骨にて東西に長く、古墳のような形にも似ており、何らかの信仰に関係した塚のようである。飯森山の北東の「鑄田（現在、水田）から、破損した複数の「五輪塔」が出土しているが、鎌倉末から室町前期の物で、弘法大師の時代のものではない。

また、現在の飯森山は二度にわたる砂丘形成によりつくられたもので、平地に盛られた塚ではない。南東に「助山」と称している七十米もの砂丘があり、川南にはこれに並ぶ「八鬼森」・「長峰」など数多い。

「出羽国風土記」にみえる「・色の黒き砂の交わりたるは煙の火氣を以て色の替りたるや・」とあるが、この黒い砂は「古砂丘」の上にできた厚さ二十―三十センチ位の砂質泥層であると考えられる。

この砂質泥層は、砂丘全体に分布しており、砂丘の不透層として「清水・しずで」とかかわってくる。

三、「井守山・イモリ山」説

「イモリ」は、池・沼・井戸などに生息している両性類のイモリ科の生物。

このイモリが多く住んでいたから「いもり山」になったというのである。

砂丘という名前からイメージして砂漠。砂漠というと水不足を連想するかもしれないが、川南の砂丘は地下水の宝庫なのである。砂丘農業にスプリンクラーが普及するまでは、農業用水も飲料水も全て地下水を利用していたのである。砂丘のいたる所に「清水出・スズレ・スズデ」と称し、湧き水が流れ出ていた。

雨水が砂丘の不透層の役目をしている「砂質泥層」にたまり、この水が砂丘の表面に流れでてくるのである。「清水出」の代表的なひとつに「飯森山清水出」があった。山の南側で流れでる水量も多く、その上水温は年間常時十五―十六度に保たれた自然水。こんな場所に「イモリ」が住み着くのは当たり前かもしれません。「鱒・マス」の孵化場まであったことを知っている人は、数少なくなった。

さて、この「イモリ」であるが、古語では「アカハラ」。その黒焼きははれぐすりといわれた。

古名が「アカハラ」では、この説の信頼度もうすくな

る。

四、「アイヌ語と「恋山」説

「奥羽観亦聞老志」に、「坂田津ノ近キニ恋山アリ袖湊ハ坂田津ト同所デアル恋山は飯盛山ノコト・・」とあり、恋は国府の訛ったもので、アイヌ語の「海の波浪」を指しているという。

「イモリ」の「イ」は、第三の称格で名詞の「モリ」（頭状の小山）についた例で、常に第三人称形を取る。「イモリヤマ」は、アイヌ語で「その小山」という意であるという説である。

五、「飯盛山」と「飯森山」

「山形県史提覧」には、「小巒あり 其状穩秀にして飯を盛りたるに依たり 故に飯盛山と号す」とあるも年代により記載の仕方が異なっている。

○ 庄内三郡之図 飯森山の地名なし。東部に「ハンの森」の地名がみえる。 正保年中（一六四四）

○ 象潟大地震 飯森山崩れ北側ハゲ山と化す。山高低

くなる。

○ 酒田古絵図 「イモリ塚」 文化元年（一八〇四） 天保三年（一八三二）

○ 飯盛山古図 「飯盛山」 文久三年（一八六三）

○ 酒田町絵図 「飯盛山」 慶応年中（一八六六）

○ 国土院地図 「飯森山」この時より統一される。

明治二年

○ 袖浦村地図 「飯森山」現在に至る。

大正二年（一九一三）

三 濱中とラビツカ

濱中は、貞和年間（一三四六～四九）に、越後国岩船郡中濱（現・新潟県山北町中濱）より、移住開村したという口碑がある。

この濱中には、文政十二年（一八二九）己丑八月に、庄内藩士成田兵左衛門が作成したものとされている、唯一の絵図面が残されている。

享保三年（一七一八）に、濱中村は大火のために壊滅、

このため防火を計った復興を考え、村の道路を基盤の目状にした宅地の割方絵図であるが当時としては画期的なものであった。

この絵図の中に「ラビッカ」（清水・毒水なり）と記された地名がある。

濱中地域には、「長森清水」をはじめ数多くの清水出があるが、「ラビッカ」という名称の清水出は聞いたことがなかった。村の古老に尋ねても誰も知らない。長森清水の北西には「七山清水」があつたが、流れでる地下水の量も少なく、おまけに濁り水で、農業用水として利用するのがやつと。とても飲料水どころではなかったという。しかし、なぜ「ラビッカ」と書きしるしてあるのか、今もって分からない。

そこで、これはアイヌ語ではないかと推測を試みてみた。

「ラ」は「下に降る」の意。「ピ」は「小さい石」。「カ」は「上」。「ピイエ」は「濁り水」の意で、「ラーピイエーカ」とは、「小さい石を降る濁り水の山」になる。おそらく濁り水のため、飲料水として不適だったため毒水

と付記したのかもしれない。すぐ近くに庄内藩の矢場があつたので、藩士に注意を？

四 黒森

承安四年（一一七四）に、大盗賊・熊坂長範の妻とその一族田村柰之頭が逃れてきて開村したという口碑がある。だが、この熊坂長範は生没年不詳の実録は見えない人物。義経記に登場する人物である。

また、一説には鎌倉期（一一九二～一三三三）に、土着したともいわれている。

最近部落内の「田村」姓の方が、盗賊の子孫と云われるのは末代までの恥として、改姓したという笑うに笑えないことがあつたが、口碑は口碑に過ぎないのに……。庄内には幾つかの黒森・黒森山があるが主に山地で、砂丘の東側にみえるのは、この黒森だけである。

黒森の地名の由来は、「針葉樹・黒木がある土地」の意で、松が黒木でその森のある所から、「黒森」という

地名になったとされる。

「まつ・松」という語は万葉集にも見えるが、「赤・黒」松の区別はない。

しかし、黒森の松は、「黒松」であることは、海岸地の成育条件から考えても間違いがないといえる。

もともと、海岸地帯には針葉樹。広葉樹などが繁茂していたが、戦乱や塩焚きの燃料としての伐採が原因で砂丘化が急速に進んだと云われている。

このため砂丘の植林が行われたのであるが、黒森は海岸地から離れていたので、伐採の難をのがれ若干の樹木が生育していたようである。黒森の東側には「ハンの森」という地名が古図に記されている。

「ハンの木」は、かばのき科の落葉高木。海岸地にも自生していたと云われている。

黒森をアイヌ語で、説明できるとする説もある。

「クロモリ」の「クル」は、大型の獣。「ロ」は、たくさん。「モリ」は、中程度の山の意で、「大型獣の沢山いる山」になるというのである。まさか、盗賊の子孫の地であるからということでもないであろうがもし、大型

の獣がいたとすれば「猪」の部類かもしれない。「猪山」という地名も残っている。

五 坂野邊

坂野辺新田は、川南、廣岡新田の肝煎佐藤太郎右衛門が、明和元年（宝暦十四年・一七六四）に開田す。

この地には、古くから「酒部」という地名があったとされ、また、一説には最上郡真室川の「蛙延城」と深い係わりがあったともいう。庄内藩以前の最上家の支配下にあった時代、すでに集落があったことになる。

当時の集落は、飛砂のために余儀なく東山に移転してしまい、集落は廢墟と化したというのである。だとすると「古砂丘」の形成期であるから、飛砂が激しかったころである。

現在の坂野辺は、「古砂丘」の上に形成された「新砂丘」に開村された集落であるにもかかわらず、十里塚の集落から坂野辺集落の提灯の灯りが見えたという、明治生ま

れの古老の話は、今日では想像することもできない。十里塚と坂野辺の間には、樹木など殆どない砂丘だったというのである。

「坂野辺」の地名は、アイヌ語でも説明できるといいう。「サカヌベ」の「サク」は、沼が干上がること。「ア」は、座っている。「ヌベ」は、野原で「ペー」は閉音節の語について、所の意を示す接尾語で、「沼が干上がってしまった野原」と云う意。

庄内平野の成因から考えると、うなずける説でもある。しかし、現在の地名は地形からみた名称ではないだろうか?。「坂ノ辺」の「坂」は、砂丘の東坂のこと、この坂の辺りのことから、今日の地名として記されるようになったのではなからうか。

六 十里塚

天正十二年(一五八四)に、石塚に住む「山刀党」と称す海賊が能登の船を襲うが、船頭の訓戒で海賊をやめ、

伝授された漁業を生業とし定住したのが始まりという口碑がのこっている。

口碑などは粉飾されたものが多いのに、黒森が山賊説なら十里塚は海賊説である。濱中にも村の東「八鬼森」に海賊が住み、沖を航海する船を発見するとこれを襲ったという伝説もあるから、海辺の村々にはなにか共通性があるのかもしれない。

「十里塚」という地名は、川南の十里塚と川北の十里塚がある。両地とも里程を示す塚であったのかどうかは不明である。川南の十里塚には、里程の塚であったという根拠をしめすものはない。

もし里程だとしても、何処からなのか不明である。

「城輪の柵」跡からという説もあるが、これもはっきりしない。

十里塚の古名を「十里須賀」という。「須賀」というのは、万葉集にもみえる「州・洲(す)」のことをさしている。「砂州」は縄文海進以降に形成され庄内平野は、潟湖」になったといわれている。

この説からすると、地名の発祥は縄文期にさかのぼる

ことになってしまふ。

もう一つの説は、「山神信仰」説である。

十里は「十二」の訛りだといふのである。山神信仰による十二の付く地名は、海岸地帯にも多い。

由良の十二山・十二下・十二林下。濱中の十二森などがある。

これらの「十二」は、薬師佛の眷族である「薬師十二神将」のことらしい。その信仰の起源も明確ではないが奈良朝以後といわれている。

十二の木のある十二塚がおこりだといふ説であるが、十里塚には「お根子様」称して、村人から厚く信仰されている木の根が宮野浦側の砂防林の中に祀られている。

海岸に打ち寄せられた木の根であるが、漁業の神としてだけでなく、無事息災、安産の神として今も祭典が毎年盛大に行われている。

昔は、この「お根子様」の沖を通りかかった船は、拝みながら通りすぎたものであるという話も残っている程であるから、信仰にかかわっているのかもしれない。

七 宮野浦

酒田発祥の地「宮の浦」。

昭和五年の「酒田町現勢一覽」に、「酒田町の名称は嘗て坂田砂潟と書きたりしが酒井氏入部以後は酒田の字を用う而して民住の創始は詳かならず。往古此地方海水深く湾入し僅かに鵜渡川原村東禅寺付近に少数の民家ありしのみにして 最上川南側袖浦村飯森山付近に稍々繁栄なる市街ありて之を酒田湊と称したるものの如し」とある。

「酒田山王宮修験由記」きは、「往古酒田ハ最上川ヲヘダテテ南北ニアリ川北ヲ飽海郡酒田トイヒ家数百四五十軒バカリ川ノ南ヲ 田川郡酒田トイヒ家数千余軒宮の浦ノツツキ ニシテ飯盛山ノ西ニアリ・」とある。（慶長四年）

「泉流寺縁記」には、「・・・昔宮浦繁昌ノ頃二ハ当所ヲ向フ酒田ト唱へ・・・」とある。（永正年中）

その他、文献は数あるが、宮野浦の開村は大同二年（八

〇七」という口碑がある。「県神社誌」には、この年「日枝神社」を勧請し山三宮と称したとある。黒森村では弘和元年（一三八一）に、比叡山滋賀大津市「坂本日吉大社山王権現」を奉勧し「日枝神社」を祠つたといわれているから、同じ「日枝神社」でも宮野浦の「日枝神社」は黒森より古いことになる。現在の山王祭り（今は酒田祭り）と名称する）が奉行される日枝神社は、宮野浦山三宮から奉勧移転したものである。

「酒田港概図」（明治二十六年）に、「最上川銚子口（水戸口）飯盛山付近にあり、南西に向かって流れ狭渦に注ぐ。十里塚近くに銚子口あり。」とある。この銚子口（川口）は、洪水のため幾度となく変わり現在の川口になったのは、明治十二年頃と云われている。

さて、「向かい酒田」と称された「宮野浦」の地名は、もともと「宮浦」・「宮ノ浦」と記されていたと考えられる。

現在の酒田市立宮野浦小学校の前身は、明治七年八月に創設され校名は「宮浦小学校」であった。

また、天保九年（一八三八）の村絵図面が残っている

が、その中に「宮ノ浦村之図・天保九年戊二月十につ御巡見様御道ニ付右之道之絵図面・・」とあり「宮ノ浦」と記されている。いずれも「野」はない。

「宮」は、「袖ノ浦」という地名の「袖」を「宮」にしたと考えられる。

この「宮」という語、奈良期の「出雲風土記」・「万葉集」にも見え原義は「御屋」（みや）。伊勢神宮をはじめ特別の神を祀る称である。

宮ノ浦の「山王様」は、「日吉（ひえ）山王権現」で比叡山の地主神でもあり、江戸期には、徳川将軍の産土神であったから、「山王祭」は天下祭ともいわれた由緒ある祭。この神を勧請した地を「宮ノ浦」としたのは当然かもしれない。

「宮野浦」となったのは、明治の国土地理院の地図。「飯盛山」が「飯森山」となったのも明治初期の国土地理院の地図からである。

八　むすび

東北蝦夷地の鎮撫が進められたのは、和銅五年（七一
二）に出羽国が建てられてからである。

既に慶雲年頃（七〇四）から、東北開拓のため大和民
の来住が多くなつたともいわれ、この川南にも移住する
和人が多くなつたと考えられる。

しかし、川南にはそれ以前に先住民が土着していたの
である。

大正十年（一九二一）に、砂丘の東側を蛇行しながら
最上川にそそいでいた赤川を黒森（浜中字小浜）から左
折させて直接日本海に流す分流工事（掘削）が始められ
た。

この工事の際に砂丘の表面下三十米の所から泥炭層が
発見された。そして、その上から縄文後期の土器片石器。
祝部式土器の破片などが発見されたのである。

栗・檜・柳などの樹株も掘り出されているから、砂丘
の形成前に和人が移住し、原始先住民居住地に土着した

ことを物語るものであらう。

偶然にも発見された縄文遺跡（黒森遺跡）により、砂
丘形成前は、樹木も繁茂し古代縄文人が居住しておつた
ことが分かつたのである。

最近の説に「人類学も支持するアイヌ語の縄文語後裔
説」がある。

この説の骨子は省略するが、濱中の絵図にでてくる「ラ
ビッカ」など、この後裔説と係わりがありそうであ
る。・・・